

二字漢語名詞サ変用法の変化 — 『太陽コーパス』『BCCWJ』を用いて—

間淵 洋子 (国立国語研究所 コーパス開発センター) †

Changes in the Usage of Sino-Japanese Two-Character *Sahen* Verbs: Based on the Analysis of *Taiyo Corpus* and the *BCCWJ*

MABUCHI, Yoko (Center for Corpus Development, NINJAL)

1. はじめに

国立国語研究所コーパス開発センターでは、現在「通時コーパス」プロジェクトの一環として、形態論情報付きの近代語コーパスを構築している。これまでに、2012年『明六雑誌コーパス』、2014年『国民之友コーパス』が公開され、今後も資料を拡充していく計画である。その一つが雑誌『太陽』であり、2005年に公開された『太陽コーパス』を増補改訂し、新たに形態論情報付きコーパスとして構築し直す準備を進めている。

国語研究所が中心となって開発しているコーパスでは、話し言葉（『日本語話し言葉コーパス:CSJ』）、現代語（『現代日本語書き言葉均衡コーパス:BCCWJ』）、古典語（『日本語歴史コーパス:CHJ』）と、収録する言語対象が変わっても、全て斉一な枠組みによる形態論情報の付与がなされている。これにより、コーパスを横断的（共時的、通時的）に分析することが可能となるという大きな利点があるが、一方で、通時的に見た時に品詞性の異なる語が存在し、コーパスへの品詞情報付与に際して問題となる場合がある。

特に、近代から現代にかけて漢語の品詞用法に変化が見られることは、池上(1953,1954)、鈴木丹士郎(1998)、鈴木英夫(2005)、永澤(2010)等、これまで多く言及されてきた。例えば、現代語においては、そのほとんどがいわゆる形容動詞語幹として用いられる漢語「複雑」は、近代において「スル」を伴うサ変動詞用法（以下「サ変用法」）を持つ。

- (1) 鮪と鰹は魚類の中で最も進歩したもので、その身体の構造が非常に【複雑】して居るのみならずいろいろな點が他の魚類と劃然たる區別を有つて居る。（『太陽』1925、岸上鎌吉「鰹と鮪に関する新研究」）

漢語「複雑」は、コーパスの形態素解析用辞書において「名詞-普通名詞-形状詞可能」という品詞を与えられている。形状詞とはいわゆる形容動詞語幹に相当し、上記品詞は普通名詞あるいは形状詞として機能することを意味する。しかし、近代語において「複雑」は、名詞でも形状詞でもなく、サ変動詞として用いられる例があり、付与される品詞情報との間に乖離が見られる。

本発表では、このような問題を生じる漢語の把握を目的とし、二字漢語名詞のサ変用法について、『太陽コーパス』『現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下BCCWJ）』を用い総合的な調査を行う。その上で、近代語-現代語間の品詞性変化の有無や、サ変用法比率の変化について、実態を報告する。

† mabuchi@ninjal.ac.jp

2. 調査概要

2. 1 コーパス

調査には、2005年に公開された『太陽コーパス』、および、2011年に公開された『BCCWJ』を用いた。

『太陽コーパス』は、言文一致を経て口語体による書き言葉が安定し普及する時期（明治時代後期～大正時代）の書き言葉を代表できるコーパスとして作られたものであり、月刊総合雑誌『太陽』（博文館）の明治28（1895）年、明治34（1901）年、明治42（1909）年、大正6（1917）年、大正14（1925）年について、広告や著作権処理ができなかった記事を除くほぼ全文を対象にした約1450万字からなるデータである。分量の多さ、ジャンル・文体・著者等の多様さから、近代における様々な言語事象を観察するのに有用な調査対象資料である。

『BCCWJ』は、現在日本において入手可能な唯一の均衡コーパスであり、書籍、雑誌、新聞、ブログ、教科書、法律といった様々なメディアから1億430万語のデータを格納する、現代語のサンプルとして好適な調査対象資料である。

『太陽コーパス』に対しては、近代文語文を対象とする形態素解析辞書「近代文語 UniDic」（小木曾 2009）と旧仮名遣いの口語文を対象とする形態素解析辞書（小木曾 2012）を用いて形態素解析を行い、形態論情報を付与したデータが国立国語研究所の形態論情報データベース（小木曾・中村 2011）に格納されている。『BCCWJ』の形態素解析情報データも、同じデータベースに格納されているため、本発表では、このデータベースの2013年12月時点の短単位情報データを用いた¹。データ量（自立語）は『太陽コーパス』5,034,799語、『BCCWJ』58,823,987語である。

2. 2 調査対象表現の抽出

本研究で調査対象とするのは、二字漢語名詞のサ変用法である。

今回、調査対象を二字漢語に絞るのは、一字漢語名詞のサ変用法は、「スル」との結合度が高く文法的な振る舞いが二字漢語のそれとは異なり、また、それを反映してコーパスの単位・品詞体系においても、二字漢語＋「スル」が名詞＋動詞の2単語となるところ、一字漢語＋「スル」は全体で動詞1単語となるという大きな差があるためである。また、三字以上の漢語についても、二字漢語が元になった複合語が多く、元となる二字漢語の分析を先立って行う必要があると思われるため、今回は扱わない。

調査対象表現である二字漢語名詞のサ変用法の例を採集するために、形態論情報データベース中『太陽コーパス』『BCCWJ』の各コーパスから、以下の検索条件に合致する用例を抽出した²。

¹データベース内の形態論情報には誤りが含まれる。また、『太陽コーパス』は整備途中のものであり、今後データの変更に伴い、本稿に挙げた数値も変動する場合がある。

² 検索にはSQLを用いた。

```
select c.lemma, c.reading, c.pos, count(*) as 粗頻度
from corpus as c with (nolock)
inner join corpus as c2 with(nolock) on c.[close]=c2.[open] and c.[file]=c2.[file]
where c.pos like N'名詞%' and c.wType like N'漢' and len(c.lemma)=2
and c2.lemma in (N'為る', N'出来る')
and c.corpusName like N'太陽 c'
```

- ・ キー条件：[品詞] が“名詞”かつ [語種] が“漢語”かつ [語彙素] の文字数が2文字
- ・ 後文脈条件：[語彙素] が「為る」または「出来る」

これにより、『太陽コーパス』『BCCWJ』のいずれかのコーパスにおいてサ変用法を持つと思われる二字漢語として約 11,813 語を抽出することができた。次に、この検索条件により抽出した語彙素について、サ変用法を含めた全出現例数を計測し、『太陽コーパス』『BCCWJ』の両コーパスにおいて「自立語 100 万語あたりの相対頻度で 10 例以上の用例が確保できるもの³」を、近代語・現代語比較用の語としてリストした。この条件は、本研究においてサ変用法の有無やサ変用法比率等の分析に耐える用例を確保するために設けたものである。

更に、リスト語の抽出計測値においてサ変用法が極めて低頻度の語や複数品詞にまたがって用いられる語については、実際の用例を検討した上で、以下のものを分析の対象外として排除した。

- ・ 明らかに誤解析のもの
- (2) 【もよう】す (催す) (「模様」; 『太陽』1925, 著者表記なし「国語、字音仮名遣改定案」)
- ・ 複合語の構成要素となるもの、または、連体修飾を受けるもの
- (3) 地方の富豪階級が替る替る立【候補】して、(『太陽』1925, 無腸公子「新長者議員の顔触」)
- (4) 皆さんはどんな【対策】していますか? (『BCCWJ』特定目的・知恵袋 2005, Yahoo!知恵袋)
- ・ 副詞として機能しているもの
- (5) しかし、竹下は反逆したが、海部は【結局】しなかった。(『BCCWJ』図書館・書籍 2005, 岩見隆夫『角栄以後』)

その結果、調査対象となる語彙素は 1,203 語に絞られた。このように調査対象と定めた、近代・現代のいずれかでサ変用法を持つ二字漢語名詞を、以後「サ変名詞」と呼ぶ。

3. 調査結果と分析

3. 1 サ変用法の有無

2 節に示した調査方法により抽出したサ変名詞を、両コーパスでのサ変用法の有無によって整理すると以下の通りである。表 1 に語数を、表 2 に語例を示す。

表 1 コーパス別に見た調査語のサ変用法有無

コーパス	サ変あり			サ変なし	
	語数	サ変用例数	全用例数	語数	全用例数
太陽	1,078	90,000	353,588	126	56,041
BCCWJ	1,139	1,020,918	5,271,122	64	283,080

表 1, 表 2 より、どちらかのコーパスでしかサ変用法が見られない語が、少なからず存在することが分かる。

このうち、『太陽コーパス』でのみサ変用法が見られる語について、『BCCWJ』での非サ変用法と共に例を示してみよう。

³ この相対頻度は、太陽コーパスにおいては粗頻度で約 50 例、BCCWJ においては約 590 例に相当する。BCCWJ における相対頻度 10 の語には、例えば「生計」「好感」「特質」「忍耐」等があり、現代語において、どのようなジャンルの文章にも現れ得る一般的なレベルの語と言える。

表2 コーパス別サ変名詞例

	語数	語例 (サ変用法の相対頻度上位 20 語。括弧内の数値はサ変用法の粗頻度)
太陽のみ	64	構造(26), 一挙(18), 出来(11), 損害(8), 結局(7), 理想(7), 秩序(6), 傾向(6), 根底(5), 次第(5), 長寿(4), 因果(4), 生計(4), 運輸(4), 周囲(4), 手段(4), 損益(3), 伝説(3), 服装(3), 総裁(3)
BCCWJのみ	126	電話(2447), 機能(1526), 遭難(112), 妥当(96), 当面(85), 冒険(60), 哲学(37), 工事(36), 都合(34), 欲望(24), 事故(19), 家事(16), 科学(16), 強盗(12), 競馬(11), 会計(9), 元気(7), 言動(7), 思想(7), 人気(7) * 太字は近世末期以降見られる漢語
共通	1,013	研究(1037,1866), 発達(960,1684), 従事(874,1649), 組織(789,1190), 増加(1239,7200), 実行(893,3526), 輸入(554,1154), 進歩(477,467), 拡張(459,541), 反対(610,2357), 主張(796,4686), 注意(835,5433), 発見(873,5928), 養成(389,311), 希望(538,2218), 維持(689,4061), 占領(396,666), 観察(584,3005), 奨励(351,440), 増進(304,195) * 粗頻度は(太陽, BCCWJ)

- (6) 鐵煉瓦石、コンクリートの如き不燃質を以て【構造】したる建物も (『太陽』1895, 著者表記なし「工業」)
- (7) 一般に生き物の【構造】は、知れば知るほど驚嘆すべき合目的性で (『BCCWJ』図書館書籍1996, 山本健一『脳とこころ』)
- (8) 其他の代議政國も十九世紀の中半以來概ね中央集權の主義に【傾向】せるの事實あるを認む (『太陽』1901, 加藤政之助「立法行政の調和 (附現制度の改正) (承前)」)
- (9) 住宅地価格は上昇率が高くなる【傾向】を示している。(『BCCWJ』特定目的・白書1981, 国土庁『国土利用白書』)

(6)では「構造」は漢字の字義通り「構え造る」意で用いられているが、(7)では「造られた結果できた仕組み」を意味する。同様に、(8)では「傾向」がやはり字義通りの「かた向く」意で用いられているが、(9)は「かた向いている状態」を意味する。これらの「構造」「傾向」という語において現代語でサ変用法が見られなくなったのは、「構え造る」「かた向く」といった動作から、その結果に焦点が移行し定着したことで、元の動作性を持つ意味用法が駆逐されたものと考えられる。

『太陽コーパス』のみでサ変用法が見られる語の多くは、「構造...構え造る」に見る動詞の並立や「結局...局を結する」に見る目的語と動詞の組み合わせなど、二字漢語の構成要素となる漢字自体が動作性を持つ。大量の漢語が新たに流入し一般に多く用いられた「漢語定着期」の近代においては、このような字面から動作性の意識できる語に「スル」を接続して簡単に動詞化するような用法が、多く行われていたものと思われる。

一方、『BCCWJ』でのみサ変用法が見られる語についても、同様に両コーパスでの用例を比較してみたい。

- (10) 落葉は蘚苔と共に森林が營む所の水源涵養の【機能】をたすく、(『太陽』1901, 市島直治「落葉の効能」)

- (11) 地域が解体し、親族のネットワークが【機能】しないところでは、『BCCWJ』出版・書籍 2003, 中西正司・上野千鶴子『当事者主権』)
- (12) 未だ遠い後のことであるにも拘らず、すぐ【当面】に差し迫つたことのやうによく重吉夫婦の問題となつた。(『太陽』1917, 加能作次郎「漁村賦」)
- (13) しかし今日、地域福祉が【当面】している課題からみると、『BCCWJ』図書館・書籍 1992, 真田是『地域福祉の原動力』)

(10)では「機能」は「働き」を意味するが、(11)では「働く」「作用する」意で用いられている。「機能」は、『日本国語大辞典第2版』によると明治中期以降訳語として広まった語であり、『太陽コーパス』においては原義の名詞用法のみが見られるが、定着する過程において原義の持つ動作性が焦点化され動詞用法が派生したものと考えられる。(12)では「当面」は「目の前」の意で用いられており、(13)では「直面する」意で用いられている。『日本国語大辞典第2版』によると、前者の意の「当面」は中世から見られる用法であり、後者の用法は明治末期以降に見られるものである。先に見た近代にのみ例の認められるサ変用法を持つ語と同様に、漢語構成要素の「当たる」「向き合う」と言った字義による動作性の焦点化から動詞用法が派生し、元の意味を駆逐して定着したものと思われる。

なお、上記では、一方のコーパスに用例が一例も見られなかったもののみを挙げた。『太陽コーパス』での出現度数1と『BCCWJ』での出現度数1では、元のコーパスサイズが異なるためその重みが全く異なるが、用法の有無を問題にする際に、出現度数1は無視できないためである。ただし、実際には『BCCWJ』のような大規模なコーパスにおいて、出現度数1はノイズとなる場合もある。今回の調査においても、『BCCWJ』において出現度数1や2の極めて低頻度の例については、非現代語の引用や、非現代語的文脈(史伝、歴史小説など)における用例、特殊な使用域(法律用語、文学性の高い表現など)におけるものが大半であり、これらは現代語においてサ変用法が廃れたものと判断して差し支えない。以下に、近代に見られたサ変用法が現代ではほぼ失われた語とみなせる語例を示す。これらの語が持つ言語内生的な特徴は、先に見た『太陽コーパス』のみでサ変用法が見られた語と差がなく、動詞用法の衰退理由も同様のものであろう。

表3 サ変用法が廃れた二字漢語の例

複雑(31), 困難(28), 予算(24), 是非(21), 徒歩(21), 自信(16), 沙汰(14), 膨大(14), 固有(13), 教養(11), 不審(11), 悪口(9), 経歴(8), 奉行(8), 一目(7), 根拠(7), 企業(5), 通商(5), 伝統(5), 出身(4), 騒動(4), 昼食(4), 栄養(3), 現実(3), 規約(2), 疑惑(2), 集団(2), 反動(2)	* 括弧内数値は『太陽コーパス』のサ変用法粗頻度
---	--------------------------

3. 2 サ変用法の比率

次に、調査対象とした語の全体の用例のうち、サ変用法がどの程度の比率を占めているか(以下「サ変率」とする)、両コーパス間でその比率に差があるかを調査した。比率を求める必要があるため、どちらかのコーパスで出現度数が「0」となる語は、調査対象から除外した。

こうして求めたサ変率は、当該の漢語が動詞性の強い語なのか、名詞性(あるいは他の品詞性)の強い語なのかを計る指標となる可能性がある。以下に、『太陽コーパス』におけるサ変率上位10位、下位10位の語の各コーパスでの出現度数、100万語あたりの相対頻

度, サ変率を例示する。

表4 コーパス別サ変率

語	太陽			BCCWJ		
	粗頻度	相対頻度	サ変率	粗頻度	相対頻度	サ変率
表明	75	14.9	98.68%	1495	25.4	68.67%
指摘	135	26.8	98.54%	5552	94.4	52.22%
無視	234	46.5	97.50%	3806	64.7	87.47%
除去	109	21.6	97.32%	684	11.6	41.56%
着目	55	10.9	96.49%	728	12.4	92.15%
發揮	438	87	96.05%	3497	59.4	88.49%
関連	126	25	95.45%	2975	50.6	26.09%
従事	874	173.6	95.41%	1649	28	62.63%
阻止	56	11.1	94.92%	769	13.1	71.14%
関与	53	10.5	94.64%	1283	21.8	60.01%
司令	1	0.2	0.18%	1	0	0.04%
費用	1	0.2	0.17%	1	0	0.01%
無理	1	0.2	0.16%	745	12.7	7.24%
総督	1	0.2	0.15%	1	0	0.16%
行政	1	0.2	0.12%	1	0	0.01%
現象	1	0.2	0.11%	35	0.6	0.61%
革命	1	0.2	0.10%	6	0.1	0.11%
結果	3	0.6	0.08%	25	0.4	0.08%
目的	1	0.2	0.04%	2	0	0.01%
必要	1	0.2	0.02%	7	0.1	0.01%

更に, サ変率によって「高頻度グループ (80%以上)」「中高頻度グループ (40%以上 80%未満)」「中頻度グループ (20%以上 40%未満)」「中低頻度グループ (5%以上 20%未満)」「程頻度グループ (5%未満)」に層別し, 両コーパスにおける語の分布をクロス集計したものが表5, これを元に語を類別したものが, 表6である。

表5 両コーパスのサ変率分布

太陽\BCCWJ	80%以上	40%以上	20%以上	5%以上	5%未満	合計
80%以上	4	47	8	1	0	60
40%以上	7	156	139	41	7	350
20%以上	0	25	111	80	14	230
5%以上	0	9	43	90	87	229
5%未満	0	1	7	19	117	144
合計	11	238	308	231	225	1013

表5の合計値から, サ変用法の比率は相対的に近代で高いことが指摘できる。また, サ変用法を持つ漢語には, 通時的にさほど変化せず動詞性の強い語 (表6 A), 動作性の弱い語 (同 B), どちらにも属さない語がある一方, 近代から現代で動詞性が弱くなる (同 C), あるいは強くなる (同 D) といったように変化している語が存在することが分かる。

では、実際にどのような語に、どのような変化が見られるかを確認してみよう。

表6を見ると、近代から現代で動作性が下降するものは、「養成」に見られるように複合語構成要素（「教員養成」「養成所」など50%が複合名詞用法）としての性質が強いことや、「携帯」に見られるように派生的意味用法（60%が「携帯電話」の略）の勢力が圧倒的に強いことなどに起因して、相対的にサ変用法の比率が低くなっているものである。

表6 サ変率による語の類別

サ変率	語例
A.動作性强 (50%以上)	表明, 無視, 着目, 發揮, 従事, 阻止, 関与, 遭遇, 到達, 明記, 明示, 付与, 熱中, 断言, 適合, 目撃, 断念, 否定, 計上, 接近, 躊躇, 掲載, 記入, 尊重, 排除, 付着, 獲得, 公表, 挿入, 着手, 通過, 留意, 消滅, 軽蔑, 実現, 起因, 発見, 推測, 記載, 期待, 提唱, 注目, 沸騰, 予期, 現存, 送付, 通用, 紹介, 提出, 断定, 連想, 感心, 一貫
B.動作性弱 (2%未満)	対策, 学問, 困難, 収入, 騒動, 信号, 免許, 競技, 統計, 総理, 展覧, 利益, 衝動, 保守, 懲役, 疑惑, 行為, 病気, 感覚, 収益, 電報, 規程, 客観, 直接, 栄養, 通商, 貿易, 宴会, 留守, 中立, 戦争, 出身, 信託, 殺人, 後継, 反動, 現在, 収支, 合戦, 決算, 潜水, 起源, 訴訟, 現実, 感想, 主観, 犯罪, 娯楽, 会議, 意思, 将来, 現行, 予備, 形式, 意志, 意見, 司令, 費用, 総督, 行政, 現象, 革命, 結果, 目的, 必要
C.動作性下降 近代(40%以上) 現代(10%未満)	養成, 攻撃, 増進, 記憶, 建設, 運転, 許可, 防止, 指導, 執行, 対照, 矯正, 声明, 開発, 勧告, 集合, 合併, 論議, 還付, 思考, 総合, 覚醒, 操縦, 乱用, 連続, 搜索, 携帯, 連結, 冷却, 出願, 啓発, 表彰, 償却, 虐待, 投資, 歩行, 担任, 会談, 加盟, 斡旋, 給与, 企画, 整備, 宿泊, 廃棄, 同伴, 公認, 配列, 応答
D.動作性上昇 近代(20%未満) 現代(40%以上)	油断, 考案, 応援, 即位, 発動, 由来, 登場, 参戦, 追加, 所属

一方、動作性が上昇するものは、「油断」のように、現代においても複合語構成要素としての造語力が不高くない語において、現代では「油断できない」のように「スル」「デキル」と専ら接続するところを、近代で「油断がならない」「油断なし」「油断ならず」のように「スル」以外の語と接続するバリエーションがあることや、「発動」のように、固定した言い回し（37%が「○○の発動」）や雑誌『太陽』の特集に起因する特定語（35%が「発動機」）が多いことなどに起因して、サ変率が相対的に低くなっているものである。

このように、近代から現代へと、サ変率に変化のある語については、語の造語力、別義の派生による使用域の広がりや語義の限定、コーパスの性質の差（サンプルコーパスか全文コーパスか）による用法のばらつきに変化要因を求められる可能性が高く、サ変率を単純に動作性の強さを計る指標として用いることは困難であることが分かった。

3. 3 近代におけるサ変用法比率の変化

次に、『太陽コーパス』と『BCCWJ』とでサ変率に大きな現象が見られるものについて、『太陽コーパス』の内部で変化が起きているかを確認するため、太陽コーパス全体で50例以上のサ変用法があり、かつ、『太陽』の出版年による5カ年の層別（1895, 1901, 1909, 1917, 1925）で、出現度数0になる年がない語から12語を対象として、サ変率の経年変化を見た（表7, 図1, 図2, 図3）。

その結果、図1のように漸次的にサ変率が減少するもの、図2のように大きく減少しないもの、図3のように年によるばらつきが大きいものと、複数のパターンが認められた。

このうち、図1に示した漸次的にサ変率が減る語については、使用頻度においても年を追って極めて低頻度になっている(表1)。これらの語は、現代でもサ変用法がほぼ意識されない語であり、近代語において既にサ変用法の衰退が始まっていた語群と位置づけられる。一方で図2に示したサ変率の下降が見られない語は、やはり現代でサ変用法が意識されないものであるが、これらは近代においては保持されていたサ変用法が、現代に至る時代の流れの中で衰退した語群と考えられる。また、図3に示した年によるサ変率の変動が大きい物は、現在でもサ変用法が存在する語が多く、サ変率の変化は、3.2節で見た他用法との分布により相対的に変動しているものと位置づけられる。

表7 『太陽』におけるサ変用法の変遷(粗頻度)

語	1895	1901	1909	1917	1925	合計
住居	31	21	5	4	3	64
協同	11	23	9	12	2	57
施設	13	18	8	14	1	54
同盟	64	15	10	6	2	97
携帯	34	11	6	1	4	56
合同	14	26	27	10	70	147
総合	6	10	14	19	14	63
会合	18	14	16	6	2	56
装置	13	15	5	9	11	53
一言	49	60	36	39	17	201
適当	20	20	16	10	11	77
原因	10	27	38	12	36	123

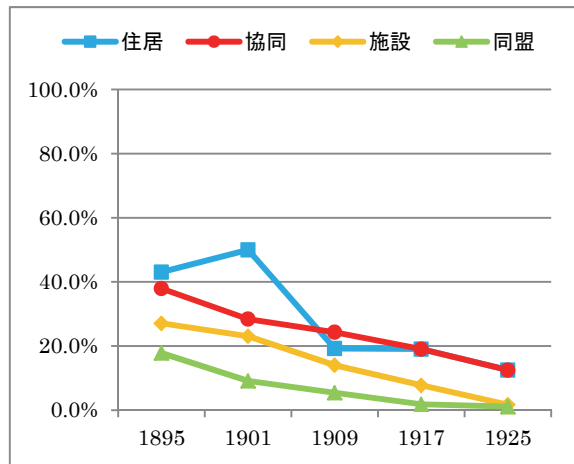


図1 サ変率の変化A

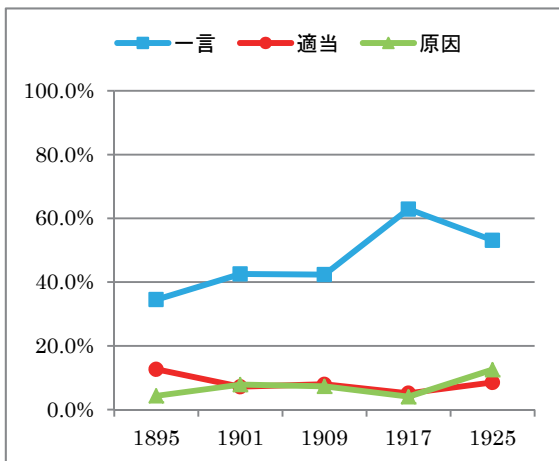


図2 サ変率の変化B

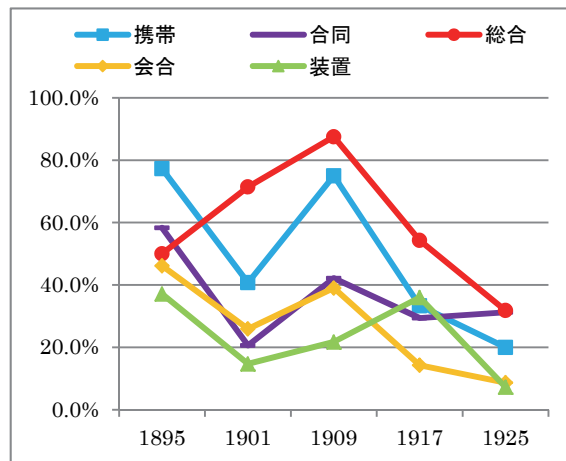


図3 サ変率の変化C

4. 考察：サ変用法の有無やサ変用法比率の変化は何を表しているか？

上記調査により以下の結果を得た。

- ・ 近代語と現代語の間で、サ変用法の有無に差のある語が存在する。これは、時代によって品詞性が変化したものと言える。
- ・ 変化の方向性は、サ変用法が衰退・消失するものと、新たに獲得するものの両方が見

られる。

- ・ サ変用法を持つ漢語について、当該漢語全体の用例中のサ変用法比率によって、動詞性の強い語か弱い語かに分類した結果、一部にサ変用法比率の大きな変動が見られた。その要因は、個々の語によって動作性の強さ以外の可能性が絡むものもあり、必ずしも漢語サ変名詞の動作性が現代において弱まっているとは言いがたい。
- ・ サ変用法が近代から現代にかけて大きく減少している語について、『太陽コーパス』の内部で発行年による層別をした上で比率の変化を追うと、既に近代で衰退傾向が見られるもの、近代では保持されているがその後衰退したと思われるもの、用法の衰退とは異なる要因により変化するものがあった。

サ変用法の衰退・消失原因は、漢語定着期において語構成漢字の字義から得られる直接的な動作性のある語義から、動作の結果や状態を表す派生的意味に勢力を奪われたためだと思われる。一方、サ変用法の獲得は、訳語として出現・定着した漢語が、語義の持つ動作性から動詞用法を派生させたり、漢語の語構成パターンからの推論的な語の分解・再構築によって動作性が意識されたりすることによるものと考えられる。

調査対象とした二字漢語名詞は、個別にも、また全体的にも、近代と現代とでサ変動詞として用いられる比率に差がある。現代は近代に対してサ変用法の比率が低い。これらは、一見、サ変用法の衰退のようにも見えるが、サ変動詞以外の用法を観察すると、意味の多様化による名詞用法や形容詞・副詞用法の増加、複合名詞の増加など、語の定着に伴う用法の広がり、バリエーションの増加と見るべきであろう。

5. まとめ

本発表では、『BCCWJ』と『太陽コーパス』の形態論情報付与データを用いて、サ変用法を持つ二字漢語名詞の抽出を試み、以下の調査報告を行った。

- ・ コーパス別に見るサ変用法の有無とその差異
- ・ 全用法中のサ変用法の比率からみた語の分類
- ・ 近代におけるサ変用法比率の変遷

これらの調査から、両コーパスでのサ変用法の使用状況には差があり、現代語では近代語に比してサ変用法が大きく減少していることが分かった。この減少は、サ変用法の単純な衰退ではなく、定着期の漢語が次第にバリエーション（用法や使用域）を増やして、日本語の語彙として馴染み確立されていったことを示していると考えられる。

なお、今回、手法や時間的な制約によって残された問題点のいくつかを以下に示す。

《名詞以外の品詞が割り当てられる二字漢語の品詞性変化》

今回の調査では、データベースからの対象語抽出の際に、形態素解析辞書 Unidic の大分類で「名詞」に相当するもののみをターゲットとした。しかし、二字漢語がサ変用法を持つものには、以下のような「名詞」以外の品詞が割り当てられる語も存在する。今後は、これらの語も対象として、品詞性の変化を検討すべきである。

◆ 形状詞のサ変用法

- (14) 租税制度として所謂體系論者の唱ふる様に組織が【完全】して居ない（『太陽』1925, 記者「財界時事小話 税制整理と日銀利下問題」）

◆ 副詞のサ変用法

- (15) 世上の一部分にも漢學を廢止せんとする者少なからぬは、**【畢竟】**するに學ぶに困難なれば也。(『太陽』1901, 大町桂月「教育時評」)

《サ変用法以外の品詞性変化》

今回の調査では、サ変用法の有無や比率の変遷のみを扱ったが、従来指摘・整理されてきた品詞性の変化には、以下のように名詞⇔形状詞・副詞間の変化などもある。

◆ 一般名詞の形状詞用法

- (16) 然るに吾が地球に於ては團塊の表皮が既に**【固形】**な状態を取り、(『太陽』1909, 鶴田賢次「普通講話 宇宙開闢論」)

◆ 一般名詞の副詞用法

- (17) 若し構成法にも新聞の様な改正が**【眞實】**企られつつあらば、(『太陽』1901, 岡田三面子「法律時評」)

◆ 形状詞の名詞用法

- (18) 蓋し投機業者にして**【豊富】**の資本を有する時は、(『太陽』1901, 水島鉄也; 佐野善作「商業世界」)

1節で示した“実例の用法と情報付けされる品詞との間に生じる乖離の問題”を検討するためには、これらの調査・整理も欠かせない。今後の課題としたい。

付記

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」(プロジェクトリーダー: 田中牧郎)による成果の一部です。

参考文献

- 池上禎造(1953)「近代日本語と漢語語彙」金田一博士古稀記念論文集刊行会編『民族論叢: 金田一博士古稀記念言語』三省堂
- 池上禎造(1954)「漢語の品詞性」京都大学国文学会『国語国文』23-11 三省堂、pp.92-101
- 池上禎造(1984)『漢語研究の構想』岩波書店
- 小木曾智信(2009)『近代文語文を対象とした形態素解析のための電子化辞書の作成とその活用』(科学研究費補助金研究成果報告書 若手研究(B))
- 小木曾智信・中村壮範(2011)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報データベースの設計と実装改訂版(特定領域研究「日本語コーパス」平成22年度研究成果報告書(JC-U-10-01))
- 小木曾智信(2012)「旧仮名遣いの口語文を対象とした形態素解析辞書」『じんもんこん2012論文集』2012(7)、pp.25-32
- 国立国語研究所(2005)『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集—』博文館新社
- 鈴木丹士郎(1998)「明治期漢語の品詞性と語形についての一考察」東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会編『東京大学国語研究室創立百周年記念国語研究論集』汲古書院、pp.728-750
- 鈴木日出男(2005)「明治時代以後の日本語 語彙・文体」近藤康弘・月本雅幸・杉浦克己編『新訂 日本語の歴史』放送大学教育振興会、pp.180-193
- 田中牧郎(2005)「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」国立国語研究所(2005)、pp.1-48
- 永澤濟(2010)「変化パターンからみる近現代漢語の品詞用法」東京大学文学部言語学研究室『東京大学言語学論集』30、pp.115-168